

「東日本・家族応援プロジェクト+ in 2024」を開催しました

人間科学研究科教授 村本邦子

今年も、2024年8月30日から9月3日、4泊5日で「東日本・家族応援プロジェクト+ in 2024」を無事に開催することができました。今回は、1週間ほど前から台風情報が出され、その進行が最初の予報から遅れに遅れ、東海道新幹線が3日間計画運休するなど、先がはっきり見えないなかでのプロジェクト・スタートとなりました。まずは、事前にメンバーで打ち合わせを行い、台風に関する方針を確認しました。常に情報に注意するが、情報に振り回されないこと、実施を前提に、交通手段がなかったり、警報が出た場合はキャンセルし、可能な部分は実施する。つまり、交通手段が途絶えたら、回復したところで実施可能か判断する、現地まで行ったものの現地に警報が出るような状態であれば中止し、時期を見てオンラインで補う。連絡網を作成し、随時、連絡を取り合うなどです。結果的に、冷静な判断のもと、滞りなく移動とプロジェクトを実施することができました。

一日目は移動日で、夕方の集合時間まで各自フィールドワークとなっていました。私を含め3名が前日に福島入りし、毎年お世話になっている桧久里珈琲で最近の福島についてお話を伺い、福島県立博物館、白虎隊資料館、伝承館などの視察をしました。17時半に集合し、現地の方と二日目の白河プロジェクトの打ち合わせを行いました。院生たちは、その後、おひさま広場の見学をさせていただきました。

二日目はNPO法人しらかわ市民活動支援会との共催で、りぶらん（白河市立図書館）にてプロジェクト、「団士郎漫画トーク」と「歌と遊びとお話の広場」の開催です。家族漫画展は、今年は2カ月かけて、りぶらん（7月4～9日）、大信公民館（7月25日～8月2日）、表郷公民館（8月3～18日）、白河市東文化センター（8月21～31日）の4機関で巡回展をしていました。小磯厚子さん（おひさま広場副代表）が歌やお手玉遊びを、鳴島あや子さん（白河語りの会）がエプロンシアターなど使いながら昔話を語ってくださいました。年齢の低い子どもたちが多かったにも関わらず、うまく子どもたちの関心を惹き続けながら、世代を超えて沢山の家族が楽しいひとときを一緒に過ごしました。お父さんの参加者も多く、また、今年もEMANONから高校生男子二人がボランティアとして参加してくれ、スタッフ間の世代交流も進みました。院生たちにとっても楽しい時間だったようです。

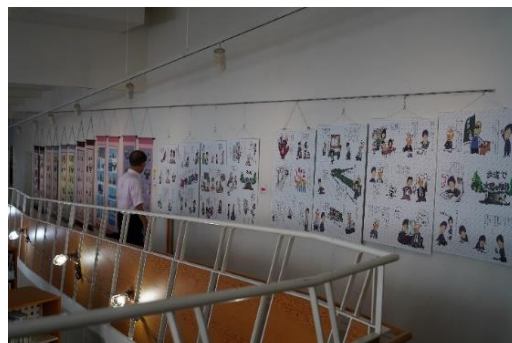
漫画トークのアンケートには、「とてもおもしろかったです。自分の家族や職場と重ねながら聞きました」（50代女性）、「身近なテーマで『ある、ある』と共感しながら楽しくこれからの生活に活かしていきたいと思いながら聴かせていただきました。ありがとうございました」（60代女性）など、遊びのアンケートには、「お手玉の感触とか楽しそうにしている親としても嬉しかったです。ありがとうございました」（30代女性）、「とても楽しく参加させていただきました。ありがとうございました」（40代男性）、「午前中、午後と楽しく参加できました。午後のお話会は学生も一緒にわらべうたを歌い、楽しい時間があっという間でした」（60代女性）など喜んで頂けて良かったです。



その後、多賀城に移動し、多賀城・塩釜プロジェクトのみなさんと打ち合わせ、交流会を持ちました。いつもながら院生たちはたくさんの貴重なお話を聞かせて頂きました。

三日目は、東日本・家族応援プロジェクト多賀城実行委員会主催、おおぞら保育園共催の形で、ふれあいエस्प塩釜にて、「団士郎漫画トーク」を行いました。アンケートには、「毎年楽しみにしています」という人たちが、遠方から来ている人たちもあり、一定程度団先生のファン層がいるようでした。「子育ての肩の力が抜ける。でも本質的でとても大切な視点を頂きました。ありがとうございます」(40代男性)、「お会いできて嬉しかったです！変わらず安心できる、私は私でいいんだな〜と、思えるトークありがとうございました！！またお話を聞ける機会を作りたいと思います！！」(40代女性)、「自分の人生と重なっていたので、すごく興味深く聞くことができた。子育てのときは他人に迷惑をかけないように注意し、ある意味大変だった。子供の進学については、応援をしているものの、不安も残るが、彼女の人生なので、親として支えていきたい。来場者の方とお話をしてみると、漫画の息子、娘の立場としての意見を、先生がご両親の立場に共感した意見とで交流することができ、楽しかった」(50代女性)などの感想を頂きました。

漫画展の方は、8月24日(土)から9月5日(木)までギャラリー開催して頂きました。今回は、塩釜の新しい会場での展示となり、多くの方が見てくれたようです。





その後、常磐線で新地町まで移動し、小川観海堂にて、みやぎ民話の会、新地語ってみっ会、川島秀一先生との交流会を持ちました。ちょうど百歳を迎えたという小野トメヨさんによる迫力ある昔話と震災体験談、村上美保子さんによる震災後「女将の7 Days」の紙芝居の上演や民話の会のみなさまのお話を聞き、川島先生の被災体験も今回、初めて聞かせて頂きました。「語りをやっている人たちはいざと言う時にどうしたらいいかを蓄えている気がする。それは何よりも強さの元になるのではないか。学生さんたちには人間を研究してほしい」との言葉に共感しました。今回、参加が叶わなかった鶴野先生、昨年プロジェクトに参加したM2の院生2名もオンラインで参加してくれました。



終了後、小高に移動、双葉屋旅館でご馳走を食べ、メンバーで振り返りの会を持ちました。

四日目、朝はおれたちの伝承館の見学、商工会女性部のみなさんのお話を聞き、昼食後、中筋純さんの案内で沿岸部視察ツアーに出発しました。イノベーションコースト構想の研究所や工場、請戸小学校、大平山霊園、原子力災害伝承館、双葉町、大熊町など見学し、富岡ホテル泊。ここでも、夕食後、振り返りの時間を持ちました。



今回、強く印象に残ったことは、時間が流れているということでした。2017年12月、避難解除して半年しか経っていなかった大平山霊園から見た沿岸部の風景は、2011年3月11日から時間が止まっていたことを強く感じさせられ、人がいなければ時間は流れないのかと思ったものでした。今回は時間の流れを感じ、帰還者は少数であっても、人がいると時間は流れるのかと思いました。また、原子力災害伝承館の語り部さんは、2019年、ここがオープンした直後に来て、お話を聞いた語り部さんと同じ方でした。お話の内容の基本的なことは同じですが、語り方や視点の変化も感じ、さらにのびやかにパワフルで、これも時が流れたことを感じさせるものとなりました。きっと私自身も変化しているのでしょう。

最終日は、富岡町メガソーラー発電所、伝言館、考証館を回りました。中筋純さんには考え抜かれたコース選択と貴重な経験をさせて頂きました。私は、最近、アートの力に強い関心を持っていますが、おれたちの伝承館の作品や中筋さんの存在にそれを強く感じさせられました。

お世話になったみなさまに心より感謝いたします。

東日本家族応援プロジェクト+ 2024

団士郎

同じ場所に一年一度、毎年訪れ、そこで繋がりのできた人たちと再会する。企画を思いつくるのは簡単だが、それを実現するのは簡単なことではない。それが実現できているとしたら、その背景には様々な工夫、努力と、幸運が重なっている。東日本家族応援プロジェクト+はその結果だ。

リピーターだからこそ感得できる様々なディテールが、被災地に流れる時間を感じさせてくれる。そして同時に、毎年の繰り返し行事のように、安定しているが新鮮ではない面も含んでいる。そんな感覚があった中で今年出会ったのは、新しい気づきだった。

大熊町路上パフォーマンス

作品が展示されるもっとも適切な場所。そんなことを考えたことがなかった。漫画家として掲載雑誌やマンガ展のギャラリーが当然だと思っていた。というより、他のことを考える理由がなかった。今年も全国12カ所ほどで「木陰の物語」家族マンガ展を実施して貰っている。有り難いことだと思い、どのような空間であろうと出来る方法で見て貰えれば嬉しいと思ってきた。

そんな自分が今回のプロジェクトにおいて、写真家・中筋純氏が大熊町のアスファルト道路に、長さ7メートル余のパノラマ写真を絵巻物を開くようにコロコロ伸ばしていくのを見た。(その前にも、氏が館長をする「俺たちの伝承館」の床面に別のパノラマ写真を拡げていくのは見ていたのだが。)

そこは現在、道の左右には電柱の他にはほぼ建物はなく、雑草ばかりの空き地が見渡せる。遠くに大型スーパーが开店工事まっただ中なのが見える。

見せられたパノラマ写真作品は地方の街の商店街。うまくつなぎ合わされた写真には、かつてここに存在した町並みがおさめられている。それは2011年3月の震災、津波被害からは逃れたものの、原発事故による立ち入り制限区域となって無人化して3年余が過ぎた街の姿である。

2024年9月2日現在、この場所にはほとんど何もない。巻物写真作品だけに2014年の大熊町商店街を見ることが出来る。しかしそこに人の気配はない。普通に人々の暮らしが聞こえていたのは2011年3月11日以前である。

今、路面に拡げられた写真を見ている私達には、「実態としての空き地」と「無人の商店街写真」と、「想像でしかないかつての賑わいの商店街」の三層の時間が生じている。

風化と再現

時が風景を変化させるのは誰もが知っている。しかし、この街並みの変化は、あの原発事故によるものだ。一つ一つの商店でお客と会話を交わしていた時間が消え去って14

年。おそらくもう戻らない故郷としてここに暮らした人たちの記憶の中にしかなくなった街が、10年前に撮られた無人商店街写真絵巻物として、今だけ姿を見せている。写真が撤収されれば道路だけになる。巨大ショッピングモールが完成して、人や車が行き交うようになれば、小さな川を挟んだこちら側はますます、誰も意識を向けることがない場所になってしまうのだろう。

何があってもさっさと忘れ、復興とか新構想だとか寿命の短い思いつきを次々もてはやす。起きたことを深く悩むことも何かに思い至ることもない。「そうして世の中は進んでいけば良いのだ、いつまでも昔のことを話していても仕方がない」、などと言いたがっているのは誰なのだろう。そんな時期に中筋さんのこの写真、絵巻パフォーマンスを目にしたのは、とても新鮮な驚きだった。

漫画展

私の漫画展は先にも述べたように、様々な場所で開かれている。ほぼ実話の家族の物語が展示される。実話であるから物語にはルーツがある。それが起きた場所があり、経験した人が居る。しかし今まで、その物語をそれが起きた場所に展示してみようと考えたことはなかった。(その経験をした人が、たまたまマンガを目にして、その感想を知らせてくれたことは二、三度あったが)

物語を『その場所』におけばどのように感じられるものなのだろうかと初めて考えた。写真は必ずシャッターが切られた時と場所がある。長い時間を経て、すっかり変わってしまった場所に、その時の写真を重ねることが出来る。

では物語マンガはどうだろうか？体験や思い出は時と共に人それぞれになってゆくものだろう。その場所で私が切り取って描いた物語が展示されたら、当時そこで一緒に居た人たち、あるいは登場する人たちはどう思うのであろうか？

そんな目で過去の作品を見直してみたら、今まで経験したことのないインスピレーションが生まれそうな気がして、台風気配もありつつの大熊町の路上にいた。



見て、聞いて、感じ取ったこと
人間科学研究科 実践人間科学領域 M1 稲嶺美祈

4泊5日の実習を通して、お話を聞いたりフィールドワークを行う中で、心が動くような出会いと体験がたくさんありました。現地で受け取ったものを少しでも多く伝えられるよう、レポートとして残したいと思います。

東日本大震災が「もたらしたものの」について

13年以上経った被災地は、津波や地震の傷跡が「見ようとしなければ見えない」ようになっていた。新地駅から綺麗な海が見えたのだが、ここから来た津波がたくさんのものをさらっていったことも、教えていただいはじめてハッとした。

4日目に訪れた請戸小学校では、はじめて自分の目で津波の被害を体感した。実際に津波が襲ってきた教室が見えた瞬間に、衝撃的な光景に固まってしまった。壁がはがれ、風になびかれて配線がぶら下がっている光景は、あまりに恐ろしいものだった（図1）。津波に機材や棚などが押し込められている様子も、津波の激しさを十分に示すものだった（図2）。

図1 請戸小学校の被害



図2 請戸小学校の被害



ここからは、被災した方々から聞いた、それぞれの体験記について記述したいと思う。

2日目の支援者交流会で、丸山さんから震災の体験と避難所運営に関するお話を伺った。避難所運営の間、3時間しか寝ていなかったが、終わった後も元気だったとおっしゃっていた。私には信じられないが、丸山さん自身は「感謝」をたくさん口にされており、目に見えないエネルギーを受け取られていたのかもしれないと感じた。津波で流された車の中から、綺麗な状態で返ってきた「奇跡の紙芝居」も見せていただいた。丸山さんは多くのものを失っているはずなのに、残ったものと感謝をととても大切にされているのが印象的だった。

3日目には、民話の会の方々に語りを聞かせていただいた。今年100歳になられた小野トメヨさんより、体験された地震の様子であったり、お知り合いのおばあさんが津波に巻

き込まれたお話を、その現場にいるような臨場感ある語りでお聞かせいただいた。トメヨさんは、家から柿の木まですべて流されてしまったが、お手紙が届き、すべて流されてしまったけれど私には民話が残っていると思ったという。実際の語りを通して、残っていた民話をとても大切にされて、そして魂を込めて語られていることを実感した。

加えて、村上さんから、東日本大震災の村上さん自身の 7days を描いた紙芝居を読み聞かせしていただいた。この紙芝居は、原発事故をきっかけに、広島の方々が支援の一環として民話の紙芝居を送られたところから始まったという。はじめは福島に残っている民話を紙芝居にしていたが、そのうち個人の体験を紙芝居にしたいとなり、記録から消え去りやすい「7days」をテーマとして制作された。子供のころから海の近くで暮らしていて津波でんでんこの話を聞いていたこと、新地には津波は来ないと言う夫を説得して高い場所へと逃げたこと、コンビニで床に落ちたおにぎりを集めたこと、そのおにぎりが避難していた人たちにぴったり行き渡ったこと、奇跡的に息子と電話がつながり涙したことなどが語られた。大きな何かに守られて、あるいは左右されて、そのことに感謝しながら人間は生きていくのかもしれないと感じた。

どの方々も、地震と津波の大きな被害を語りながらも、その中でも残された小さな光を見つけ出し、目を向けているのが印象的だった。私が想像できない以上に悲惨な光景を目にし、大変なこともあったと思うが、その中でも自分の運命を引き受けていく強さが感じられた。

福島第一原子力発電所事故とその後について

4日目～5日目に浜通りのフィールドワークを行う中で、まだまだ「復興」とは言えない状況にあることを実感した。フィールドワークを行う前に、案内してくださった中筋さんから、「草むらに入ったり、道端の土に触ったりしないこと」という注意を受けた。実際、中筋さんが道端の土に放射線測定器を当てると、 $0.23 \mu\text{Sv/h}$ の基準値を大幅に超える放射線量が検出された（図3）。避難区域が解除されているはずの場所が、危険と隣り合わせであることを考えると、帰らないという決断をする人々の考えが理解できる気がした。

車の中から見る光景は、人も家もほとんどない、ただ草むらとなった土地が広がっていた（図4）。そこから原子力発電所に近づくにつれ、震災当時から手つかずのまま家屋が見え始めた（図5）。

図3 $9.0 \mu\text{Sv/h}$ 以上の数値を記録する計測器



図 4 高く生い茂った草むら



図 5 倒壊した家屋



中筋さんが、かつて商店街があった道路でまだ取り壊されていなかった頃の商店街の写真を転がし、見せてくださった（図 6・図 7）。今はその商店街は更地となっており、商店街があったと聞いてもピンと来ないほどだったが、信号や木、看板などを頼りに、確かにここに商店街が存在していたことを感じ取った。

図 6 商店街の写真を広げる中筋さん



図 7 商店街のあった場所と、巻物の写真を見比べる



4 日目の最後には、フレコンバッグが積み上げられた中間処理場に訪れた（図 8）。黒い津波と思わせるほど遠くまで積み上げられたフレコンバッグを見ていると、原発事故の終結と復興はどこにあるのだろうと感じた。

また、放射能の影響を受けた方々は、前述した方々たちとは印象が異なり、未だに被災体験が過去として清算されていないように感じた。語りの中に怒りと戸惑い、葛藤、理不尽と戦い続けようとする意識が聞こえてくるような気がした。

図 8 帰還困難区域の向こう側に広がるフレコンバッグ



4 日目に、二葉屋旅館で女性部の方々のお話を伺った。震災直後の話から避難指示を受け逃げた話、1 年後に立ち入り禁止が解除されてからの暮らしの話など、長期にわたる困難と苦しさで頑張ってきた記憶を語ってくださった。ねずみが大量発生したことなど、面白おかしくお話されていたものの、その苦労は想像できないほどに大きいものであると思う。私が特に衝撃を受けたのは、賠償金を巡って市内での断裂が起こり、今でもその名残が続いていることだった。合併したてであったことや、放射能への不安や避難生活への不満もあったのかもしれないが、それが多く賠償金をもらっている住民を非難するという行動に向かったことに、どうしてなのかと言いたくなった。

その後伝承館にて、語り部の高村さんが、震災体験と原発事故による長い避難生活について語ってくださった。まず印象的だったのは、初期の頃はとにかく情報が錯綜しており、混乱した状況であったことである。そもそも避難指示が出ているという情報が流れてこなかったことに加え、10km とはどこまでが避難区域なのか、何から逃げればいいのかなど、分からないことだらけの中で避難を強いられていた。また、避難をしてくれと言われてただけで、そこからどれほどの期間避難すればいいのか、あるいはどのような健康被害が出るのかというのが明示されていなかった。個人的には、まだ安全の保障がされていない初期の頃に、避難区域に戻って仕事をしており、さらにはそこには多くの人が残っていたというのが衝撃的だった。加えて、今でも自分や子どもが被ばくしていないか、不安を抱えながら生きていることを赤裸々にお話されていて、今も被災は続いていることを思い知らされた。

5 日目には、宝鏡寺にある伝言館に訪れ、丹治さんからお話を伺った。伝言館は、「核」という視点から原発や原爆を考え、それらを「言」葉を「伝」えることでなくしていこうとする施設である。ここでは丹治さんにお話いただいた後、施設を見学させていただいた。印象的だったのは、原発事故を起こした過ちを、国や東京電力が認めていないことである。福島原子力発電所の危険性は提言されており、裁判でも事故は起きない（起きないように運営する）としていたにもかかわらず、その責任を負っていないことに驚いた。原発事故、そしてそのことによる被害や不安をなかったことにすることは、被災した方々の傷をさらに広げるようなものだと感じた。

そして、里見さんに考証館をご案内いただいた。福島での原発事故を取り扱った施設ではあるが、できるだけ展示内容から怒りや憤りを減らし、いわゆる加害者側の人たちとも「対話」できるように設計されたとのことだった。印象的だったのが、亡くなってしまった木村さん（7 歳の女の子）の展示である。救助にあたっていた方によると、木村さんの助けを求める声が聞こえていたにもかかわらず、避難指示によって救助を打ち切ったという。実際に木村さんが身に着けていたマフラーを触らせていただいたり、亡くなっていないければ同じくらいの年であるとお聞きし、助けられたはずの命の重さを実感した。

13 年を過ぎても未だ語りえないこと

上記では、被災に関連した多くの語りについて紹介した。しかし、実際には語りえないこと、そして語りえない人も多く存在しているのではないかと感じた。

民話の会の方と感想を共有する際、みやぎ民話の会の方が、「自分は被災者ではないから」と前置きした後に、電気が復旧した瞬間は嬉しかったとお話されていた。たとえ津波が来ていないとしても、原発事故の影響を受けていないとしても、そのときに感じた不自由や不安は十分に「被災」といえるのではないかと思う。13 年以上経った現在においても、自身の体験を素直に共有できない意識が残っていることに驚いた。また、考証館の里見さんも、原発事故について触れると、「風評被害を広げるな」と言われると語られていた。ほとんどの人は、自分の顔や名前を出して主張することができないという。辛さや理不尽を表に出すこともできず、何事もなかったかのように暮らしている人々のことを思うと、とても心苦しくなった。

今回語っていただいた内容はとても貴重で、それぞれが持つ被災体験と今につながる思いを強く感じられるものだった。その一方で、年月が経ったとしても語りえないものや語ることでできない人が存在し、その人たちがいつからでも語ることでできる場が必要であると強く感じた。本プロジェクトの証人として、語っていただいたことと、その裏にある語りえないことの両方を汲み取り、つないでいきたいと思う。

おわりに

本実習における出会いとフィールドワークを通して、被災地のことをより深く、そして自分事として捉えられるようになりました。一人一人の顔を見て、聞いて、受け取るという営みが、事前学習では得られない多くの学びを運んできてくれたと感じています。

最後になりましたが、貴重な被災体験を語ってくださった皆さまと、共に各地を巡った先生方と仲間たちに感謝を申し上げ、締め言葉としたいと思います。本当にありがとうございました。

2024 年度 東日本・家族応援プロジェクト 活動報告

実践人間科学領域 M1 関西まどか

東日本・家族応援プロジェクト+(プラス)に参加し、福島県・宮城県での学外実習を行った。

活動内容

活動内容は以下の通りだった。

●1 日目

到着後、各自フィールドワーク

夕方現地集合

現地レストランにて交流懇親会参加

●2 日目

福島県白河市にて

午前：「団四郎の漫画トーク」in 白河 スタッフとして参加

午後：「うたとあそびとおはなしの広場」スタッフとして参加

解散後、各自フィールドワーク 新幹線と電車で宮城県・多賀城市へ移動

多賀城の居酒屋にて多賀城実行メンバーさんとの交流懇親会参加

●3 日目

宮城県多賀城市にて

午前：「団四郎の漫画トーク」in 多賀城 スタッフとして参加

終了後、電車で福島県相馬郡新地町へ移動

午後：「みやぎ民話の会」の企画へ参加・民話や伝承遊びについてお聞きする。

●4 日目

福島県南相馬市にて

- ・『おれたちの伝承館』訪問

- ・商工会女性との懇話

- ・『おれたちの伝承館』中筋館長によるいわき視察ツアーday1

イノベーションコースト構想工業地帯

津波被害があった請戸小学校とその周辺

原発遠望

・東日本大震災原子力災害伝承館見学

●5日目

福島県南相馬市にて

『おれたちの伝承館』中筋館長によるいわき視察ツアーday2

- ・富岡町メガソーラー発電所見学
- ・宝鏡寺伝言館

いわき小滝屋にて考証館見学

解散

活動報告

1日目

10号接近につき、開催できるかどうかぎりぎりの中なんとか現地入りできた。到着後、自主フィールドワーク開始。空港から外に出た瞬間、涼しい風が吹いており、秋を感じた。昼過ぎで29度くらいで常に蒸し暑い大阪とは打って変わって大変過ごしやすい。北の遠くの地方に来たことを実感する。

まずは、腹ごしらえで「うさぎ屋」でご当地グルメ白河ラーメンを頂いた。



車の窓から見える道路沿いには果物直売所がたくさんあり、桃と梨ののぼりが目立った。流石フルーツ王国、福島だ。

食事の後は白河のアウシュビッツ平和博物館へ。アウシュビッツ収容所だけでなく原爆に関する展示も行われている。収容所で行われた虐殺映像、アンネ・フランクの一生、原爆投下後の広島の人々を描いた絵等の人類の負の遺産に関する数多くの展示がされていた。内容は悲惨と絶望そのもので、長時間そこにいることは辛かった。権力の暴走によって繰り返された罪のない人々への迫害があった事実を再認識し、博物館を後にする。



アウシュビッツ平和博物館

ホテルチェックイン後、イタリア料理店サンサーラにて懇親会。先生方からこれまでのプロジェクトの在り方、先生方の震災やそれに関連する政策、復興のありようへの思いについて伺った。



イタリア料理店サンサーラ おしゃれな内装だった。夜なので飲まなかったが、コーヒーが絶品らしい。

懇親会後は白河でおもちゃコンサルタントの小磯さんのご厚意で子どもの遊技場「わんぱーく」の見学を行った。わんぱーくは親子で一緒に遊べる公共施設だそう。子育ての場だけでなく、コミュニティ造成の場、子育て支援の介入のきっかけの場としても機能す

ることを想定されているという。



様々な種類の木材を使ったボールのプール。200 個卵型のボールがあるらしく、宝さがし感覚で探すのが楽しい。



かわいらしい遊具が多く設置されていた。家庭ではなかなか揃えられない数・価格の遊具が多くあるそう。

旅のスケジュールがばんばんに詰まっているため、粛々と行程通りに進んでいくのかと思いきや、初日から関係者の方のご厚意から予想外のイベントが発生し、ワクワクさせられる 1 日となった。

2 日目

朝の活動は白河市立図書館で行われる団四郎先生のトークイベントのスタッフ作業から始まった。院生で会場設営と受付の手伝いを行い、トークイベント開始後は参加者の方と共に団先生のお話を聞かせていただいた。



設営の様子 ボランティアの高校生とも協力して行った。

学生もお客さんに交じって団先生のトークを聞かせていただくことができた。今回のトークでは正しくあることと賢くあることの違いについて事例をもとに考える内容だった。ほかの参加者の方とディスカッションする時間も用意されており、普段あまり話す機会のない方とも楽しく意見交換しながら考えることができた。

昼にはボランティアの高校生も含めた現地スタッフの方と、自己紹介タイムがあった。午後からはうたとあそびとおはなしの広場にスタッフとして参加させていただいた。乳児～5歳程度の子どもとその親たち合計20人ほど参加されていた。この場では大人も子どもも一緒に参加し、語り手の方のおはなしの読み聞かせや体を使ったうたあそび等の活動が行われた。最初は緊張気味だった場の雰囲気もグループを作ったり手をつないだりしながら歌を歌う遊び等を通じてすぐに和らぎ、知らない人同士で盛り上がり楽しく交流するようになっていった。終了後、初対面の親同士で交流する場面もあり、ここがコミュニティ造成の場として機能している場面を実際に目の当たりにすることができた。震災に限らず、昨今の若者のライフスタイルの変化によって増加した孤立しがちな家族をつなぎとめる場として子どもの遊び場は機能していることが分かった。

撤収完了・解散後、自主フィールドワークということで、歩いて片道10分強の場所にある白川小峰城跡を見に行った。



電車と新幹線を乗り継ぎ、宮城県・仙台から多賀城市まで移動。到着後、駅前の居酒屋で多賀城実行委員会メンバーとの懇親会が開かれた。美味しいお魚やしゃぶしゃぶをいただきながら、メンバーさんの被災経験談、先生の人生論等多くのことを聞かせていただいた。

3 日目

団士郎先生漫画トーク塩釜編が開催されるエсп塩釜の開場前に、丸山さんがエсп塩釜前で津波に飲まれても奇跡的に生き残っていた紙芝居を実演してくださった。パンダがなぜかわいいのかということについて、パンダや他の動物の模様や色、形を変えながら考えてみるという内容の作品だったが、絵がとてもかわいらしいことに加えて内容も面白く、クスッと笑いながら見せていただいた。



団士郎先生の塩釜でのトーク内容は白河とは異なり、「社会の中の子育て」についてのお話だった。人生における責任を取ろうとしない最近の社会のありよう、自由な挑戦と挫折を肯定しない風潮に疑問を投げかけるものだった。

イベント終了後は電車に乗って仙台へ。



牛タン弁当とずんだ餅シェイクで短時間で仙台を堪能

仙台駅から JR 常磐線に乗り、福島へ戻り、相馬郡新地町へ。

新地の小川観海堂にてみやぎ民話の会の方からのお話を聞かせていただいた。民話「鹿狼山」等語ってくださった語り部トメヨさんは 100 歳になられたばかりで高齢で、この日の暑さも相まってしんどそうにされていたが、民話を語り始めた瞬間、背筋が伸びて物凄い迫力で話し始めたのが印象的だった。トメヨさんご自身の持つエネルギーに圧倒された。トメヨさんの後もメンバーさんによる紙芝居の読み聞かせや被災体験のお話も聞か

せていただいた。後世に教訓を伝えるために肉声で語り継ぎたい、人が直接語ることに意味があるという。

夜は小高駅まで電車で移動し、双葉旅館にて先生方と夕食をとった。



食事後は先生方とこれまでの日程で学んだこと、感じたこと等の情報共有を行った。

4日目

俺たちの伝承館の見学を行った。この施設は福島原発事故に関する情報をアートで伝える博物館だった。福島に住んでいた方から伝わる、自分が住んでいた・守ってきた土地が壊されていくことの悲しさ、くやしさが伝わった。



避難によって牛舎に繋がれたまま残され、飢えの中死んでいった仔牛の亡骸とかじられた木柵を表現した作品

伝承館を出る前に中筋さんが撮影された町のパノラマ写真を床に広げて説明してくださいました。廃墟と化した町の異様な様子が分かりやすく伝わってきた。



「おれでん」を後にし、双葉旅館に戻ってきて、被災経験に関する婦人会の方のお話を聞いた。震災によって町の機能が停止し、ネズミが大量発生し苦勞された話、もともとやっていたお店の運営に関するお話等があった。



昼食の夏野菜カレー

昼食後は中筋さんの運転する車で説明を聞きながら避難区域周辺の見学に連れて行ってもらった。もともとは町があったという区域は今ほとんどが野原になっており、その中に廃墟や新しい家がポツポツと点在している。田んぼも多くあったそうだが、土が津波が流されており、今は土壌を育てるために草をはやしては刈ってを繰り返しているため、稲作を再会するにはまだかかるとのことだった。

道中、イノベーションコートを訪問した。海沿いの広大な野原が広がる土地に小高くなっている丘があり、地区全体を見渡せるようになっていた。イノベーションコートには大きな工場が建っており、この先ここには空飛ぶ車やロボット開発、競走馬の調教場などの企業・施設が大きなプロジェクトを行う場として次々と参入するという。



もともとは街や田畑があったところも、今は津波被害や放射能汚染による取り壊しによって一面が静かな草原と化している。

お話を聞きながら、友人や趣味の中にもイノベーションコースト構想とつながりのある事柄があったことを思いだし、思いがけないところで自分やその周囲の人々が間接的に福島原発災害に繋がっていることを感じた。

中筋さん曰く、この地域では自転車ロードレース等、復興イベントが開催される予定であるという。しかし、この地域の道はシーベルト値が低いものの、今でも地元の人には汚染の危険性が高い山沿いは近づかない。我々も道を歩く際には放射能が濃縮されているため、茂みの中には入らない、道路のわきにたまっている砂には触れないようにと指導された。この辺行く時の必需品として線量計を携行しなければならないようなこの場所で、多くの人が集まるイベントを開催してもよいのだろうか？現状高い放射線値が出る、危険であると思わざるを言えない土地でそのような情報を覆い隠して無理に「復興」させようとする行政や企業に対して不信感を抱いた。

イノベーションコーストの後は津波によって校舎の1階部分が浸水被害を受けた請戸小学校へ。小学校の1階部分は津波の被害によって綺麗だった構造物の多くが大破し、廃墟と化していた。厨房の大きな調理器具が津波によって押し流されて壁に押し付けられたまま残っていたり、体育館の床が陥没していたりと、かかった力の大きさがあまりにも大きかったことが分かった。この小学校で印象的だったのが校舎の2階に上がった際の綺麗さと1階の惨状とのギャップだった。



1 階部分



2 階部分

1 階は風雨にさらされ続けており、2 階にはドアも窓もあるという違いがあるが、それにしても同じ建物に全く様相の違う場所があることは衝撃的だった。

請戸小学校の後は新設された大平山霊園を訪れた。津波によってお墓が流されてしまったため、自治体がお金を出し、無料でお墓を建設することが出来た人が多くいたという。墓地には新しくて高そうな黒くてピカピカした立派なお墓が並んでいた。前日、仙台から福島へ向かう電車の沿線上でも妙に綺麗な墓地がたくさんあったことが気になっていたが、津波によって新設されたお墓だったのだと納得することができた。

請戸小学校の後は東日本大震災・原子力災害伝承館の見学に行った。イノベーションコースト構想の一環として建設された施設だそうだ。伝承館では語り部の高村さんによる福島での被災体験の講話を聴かせていただいた。原発事故発生後、放射能について入ってくる情報の少なかった高村さんは周りの人が何から逃げしており、自分がどうすればいいのか

わからずパニック状態に陥ったという。災害時の避難への支援、その後の保障についても十分とはいえない面が多く、福島で生まれ育ち、「原発は国・地域の誉れ・誇り」と教えられてきた高村さんにとって原発災害後の国の対応は国から見捨てられたように感じ、強い恨み憎しみの感情を抱いたという。高村さんは災害発生後他の人よりも長い時間汚染地域に留まった後避難されたとおっしゃっていた。講話の中で原発災害に起因して子どもが受けたいじめや医療における逸脱行為等のお話もしてくださった。ほしい情報が手に入れられず、錯綜した状況の中で、必死に最善の選択肢を選び取っても何度もつらい経験をすることになってしまった、彼女の体験談は聞いているだけで非常につらかった。。高村さんは語り部の活動をされることに関して、すぐに逃げなかった後悔等の自分の恥ずべきことを語るのは辛く、苦しいことだが、聞いた人に語り部になり、多くの人に原発災害について伝えてもらいたいという思いからこの活動を続けられているという。自分が全然知らなかった現地で起こっていた事実は衝撃的なものだったが、実際に起こったことである以上、知っておくべきであると感じた。このお話を自分の周りの人に伝えていきたい。

伝承館の後は再度中筋さんの車に乗り、被災地の帰宅困難区域周辺を案内していただいた。道中路上にたまった砂の染料を測定したところ、10マイクロシーベルト越えの放射線量が検出されており、この地域が放射能によって汚染された場所であることを再認識させられた。車窓からは残ったままの廃墟・草木に車体のほとんどが覆われた車、フレコンバッグの目のまえに立つ神社等、なんだか、週末世界を題材にしたアニメのような光景のようにも思えた。



草が覆いつくした車、廃墟だらけの街に突如現れる新しい現代アート

フレコンバッグに埋め尽くされた大地は異様な様相をしていた。



聞く話によると、この辺の地域では失われつつあった生態系が劇的な復活を遂げつつあるという。自然破壊が叫ばれている昨今の情勢の中で、昨今は生物多様性の損失への危機感が高まっているが、たった10年そこらで復活しつつある自然の様相が一部ではあるが戻りつつあるというのだから、自然のレジリエンスや、地球レベルで見た人間の営みの小ささが実感させられる。

大草原の中に廃墟が点在する風景は、幻想的な風景に見えるだろう。まるで映画『千と千尋の神隠し』の序盤に登場する世界のような、以前はそこに存在した人の気配が消え、自然が復権し始めた世界で、美しい。しかし、この実習を通じて以前はそこに町があり、当たり前にながらんでおり普通の生活をしていたこと、ある日突然すべてを奪われ、苦しみと共に生き続ける人が存在することを知った以上、単純に結果的に美しくなった風景に浸るだけではないことはできない。そこで起こったこと、その結果を住民の目線から認識し、同じ轍を踏まないために一国民として考えて意見を持つ必要があるだろう。

最終日の夜はメンバー3人で麻雀ゲームをした。4日間の会話を通じてだいふ打ち解けて、とても楽しい時間を過ごすことが出来た。

5日目

窓向きの部屋に泊まる事が出来たため、朝はオーシャンビューの窓のカーテンを開け、日光を取り入れることからスタートしたが、最終日は集合時間が早く、景色を楽しむ時間をほとんどとることが出来なかった。残念。

本日も中筋さんのドライブと解説で街の散策を行った。車中から富岡町の桜を見ることができた。この時期は緑のトンネルになっていたが、視界上部を覆い尽くす木々から、桜の時期の景色の美しさが想像できた。道中にはオープン寸前に震災が起き、オープンすることのなかったケーゾデンキの大きな建物があった。中に家電の箱がたくさんあり、震災後それを狙った泥棒が頻発したという。

11 時ごろ夜ノ森駅前に降りた。被災地だが、花壇には花があった。花の世話をしている人がいるのだろうか？廃墟だらけの街で、建物の取り壊しが行われている目の前で未だに花の世話をしている人がいる、思いがけないところに人の息遣いを感じた。しかし、何のために、どのような思いで人の住めなくなった町で花を植え、世話をし続けているのだろうか？



福島は帰ってくる人への補償は手厚いが、そうでない人には自主避難扱いで何もないのが現状だという。（チェルノブイリでは両者への補償がある）。きらびやかな再開が進む一方で光と影の部分があるが、影の部分の扱いと風評被害と言われるのが現実だという。

次に富岡復興メガソーラーsakura を訪問し、視察担当の猪狩さんからお話を伺った。



人が住まなくなり、農業が出来なくなった土地を地主の方から借り上げ、再生可能エネルギーによる発電所に転用しているという。今はソーラーや風車ができているが、それぞれが環境問題を引き起こしている。求められるエネルギー水準は下がらない現状の中、より効率の良い発電が求められるが、より良いものを開発しようと思うとより複雑で人の手に負うのが難しくなるものばかりなのではないか。エネルギー開発の道にゴールはあるのか？と考えさせられた。

広島長崎ビキニ福島伝言館にて、事務局長の丹治さんからお話を伺った。



この施設では原子力兵器に対する反対意見を主張している。原発をなくすためには核兵器をなくす必要があり、核兵器の工場は原発であるため、原発をやめ、1日も早く再生可能エネルギーに変えていこうという旨の主張もされていた。

丹治さんは福島県民が抱く被爆への恐怖や不安、政府への不信感や怒りを熱い思いをもって伝えてくださった。講話の中では放射能に対する不安の声が多く語られていた。館内地下には反原子力に関する展示が多くされており、興味深く読ませていただいた。アインシュタインや各国の原子力に対する態度・宣言の在り方等の資料が数多く展示されていた。

今回の実習の最終訪問地は温泉地湯本の旅館古滝屋であった。到着後、1階のお蕎麦屋さんで蕎麦をいただいた。いい蕎麦を食べた後は蕎麦湯が欠かせない。



古滝屋の考証館はホテルの最上階の一角にあった。部屋にはアートや木を重ねたようなアート等が並んでいた。お話をいただいたのは館長の里見さんだった。里見さんは一福島の間人として、ここで起こったことを残したいという思いでこの考証館を作られたとのことだった。津波や地震と異なり、原子力災害では今もなお苦しんでいる方がいたり、知人が原発関連の仕事をしていたりと複雑な関係性の中にあるため、語りたがる人が本当にいない。特に実名で語ってくれる人は皆無であること、現状原子力災害のみにフォーカスして伝えている施設はないことを説明されたうえで原子力について、公、民、住民の3つの立場の人で考えて、そこで起こっている事象を知り、対話したいという思いでこの施設を造られたと語っていた。



木村さん一家の記憶が展示されている。

里見さんはこの施設に興味を持った人が引いてしまわないように、自分は怒りを伝えないようにして、多くの人を招きたい、そして一人の間人として原発災害を考えてほしいという思いを抱かれているという。

講話の中で津波被害に遭われた木村さん一家のお話を聞かせていただいた。木村さん一家は我々が訪れた双葉町のフレコンバッグ群のさらに奥の沿岸部で津波被害を受け、奥さん、お父様が遺体で見つかったが、7歳の次女汐風ちゃんが行方不明のままだったという。必死の捜索が行われていたが、原発事故により中止されたという。5年後再捜索が行われ、衣服と共に遺体が見つかったそうだ。

館内で遺品の汐風ちゃんが発見時身に着けていたマフラーの実物を触らせていただいた。フワフワしておらず、ごわごわした手触りから長い年月の間野ざらしにされていたことを感じさせられた。家族を失い、娘が行方不明のまま何年も過ごした木村さんの心境は想像を絶する。この施設に家族の記憶を託して下さった木村さんの思いに感謝したい。

原発事故が起こり、人がいなくなった福島沿岸部には豊かな自然がもどってきた。絶滅したとされる植物も芽吹いたという。この土地にはこの先40年人は住めないそうだが、今、コンクリートの大堤防の建設が始まっているそうだ。大手ゼネコン等のお金の動きによって決定されたことらしい。豊かになった自然を破壊してまでする必要のある作業なのだろうか？科学によって生かされ、科学がなければ生きていくのが難しいほど弱くなってしまった文明の人間にこの先生き延びる道はあるのだろうか？と考えさせられた。

おわりに

貴重な経験をするのできた5日間で、たくさんの方の思いを受け止め、考えてきたため、心身ともに非常に疲れた旅になった。震災にまつわる当事者の経験談や思いは一つ一つがいつもとても重たく、消化して自分なりに考えるのに多くのエネルギーを要した。

この実習では利権問題のありようやそれらに押しつぶされてきた住民の姿を目の当たりにすることになった。企業や国が利益を生み出し、国民に還元している一方で多大な損害を受けた人がいる現実があることは絶対に目を背けてはいけない。豊かさの裏には大きな力によって踏みにじられてしまう人が存在する可能性があり、震災ではそれが表出したことが分かった。

実習中の目標の一つに震災から縁遠く、自分事として考えられない自分に当事者性を持たせるということを掲げていた。しかし、4日間実際に被災された方の語りを聞き、自分なりに考えをまとめてみても、見聞きした体験を自分事として捉えなおすことは難しく、当初考えていた被災体験を自分事として捉えてみるという当事者性というものをもつことができなかった。一度に大切なものをいくつも失った人、そのような人を間近で何人も見てきた人たちの苦しみは想像を絶し、自分の中に再現することなど不可能だった。5日間の実習を通じて分かったのは自分には受け止めきれない事象がそこで起こり、今も被災者の苦しみは終わっておらず、特に福島では復興したと言えない状況が続いているということだった。自分がこの実習を通じてできることは、自分には想像も及ばない事象がそこで起こったことをリアルに感じ取り、見聞きした情報から感じ取った教訓を周りの人に伝承することなのだろう。考えてみれば、先生は実習への参加に当たって、学生に「証人になる」ことを求められていた。震災で得た教訓を自分なりに消化し、記憶の伝承を担うことで、自分も証人として、当事者になることが出来るのではないかと考える。

5日間の旅の中でたくさんの方の記憶と思いに触れ、震災を知り、教訓として自分に取り入れることができた。ツアーを計画し、多様な体験と共に私たちを導いて下さった先生方、現地で多くのことを教えてくださった宮城・福島の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

「東日本家族応援プロジェクトプラス」：「復興」と語り

人間科学研究科 実践人間科学領域 M1 高田すず

私は初めて本プロジェクトに参加させていただき、たくさんの貴重な体験や素敵な出会いの機会をいただきました。まずは関わってくださったすべての皆さまに深く感謝申し上げます。

今回の実習参加前、先生方から、俯瞰的な視点から眺めるだけではなく「私」と「あなた」という顔の見えるパーソナルな関係から物語を感じる事が大切である、とアドバイスをいただきました。私は東日本を訪れるのも今回が初めてだったため、東日本という地やそこに住んでいる方々について、漠然と遠く感じていたことに気付かされました。そこで実習では、遠くの抽象的な誰かとしてではなく、目の前に生きる等身大のその人として出会い、人生の物語をお聞きしたいと思いました。

実際現地を訪れると、震災を経た人生の物語をさまざまな形でお聞きすることができました。そして、想像していたよりもずっと力強く鮮やかな語りに終始感銘を受けました。同時に、私がこれまで知った気になっていた「東日本」の復興の姿は、大きな社会の流れのほんの一部に過ぎなかったことを痛感しました。このレポートでは、そんなパーソナルな物語との出会いと、語りをお聞きして感じたことを中心に記述します。

■民話やアートで表現されるもの

「東日本大震災・原子力災害伝承館」では、原町地区に住んでいたという語り部の方から講話をお聞きしました。県外に住んでいた元夫や旧知の友人を頼りながら、その時々で場所を移しながら避難する様子を語る様子からは、強い怒りのエネルギーを感じました。怒りの矛先は、なかなか支援や情報を届けてくれない行政や、この人災を引き起こした東京電力、さらには事前準備を怠り息子たちに不安を感じさせてしまった自分自身に向けられていました。

4 日目に訪問した「おれたちの伝承館」には、地域の方が震災の経験から感じたことや次世代へと伝えたいことをアートとして表現した作品が並んでいます。これらの語りやアートによって表現されているのは、表現者の方々が心に抱え行き場を失った憤りや悲しみなのだろうと思いました。その思いは 10 年以上経ってもなお苛烈なエネルギーとして生き続け、痛いほど切実なメッセージを放っていました。率直に言うと、私にはまだ受け止めきれないとさえ感じるほどでした。しかし、今ここで何かを受け取ったからには、今までと同じように知らなかったふりをする事はできないような気がします。

新地の観海堂では、みやぎ民話の会、新地語ってみっ会のみなさんからお話をお聞きしました。新地に伝わる昔話から始まり、新地の方が体験された震災当時の様子、そして自らの経験を広島の方とのコラボによって紙芝居にしたものなど、短い時間ではありましたがバ

ラエティに富んださまざまなお話をお聞きすることができました。特に小野トメヨさんは、100歳の方とは思えないほどパワフルな語りを披露され、そのエネルギーに圧倒されました。まさに民話に生き、民話に生かされていることを体現されているようだと思います。肉声による情景豊かな語りは、心に直接届き、語りが終わっても響き続けます。普段から馴染みがあり、地域のことをよく知る大人が語る民話は、地域に住む子どもたちにとって後々になっても響く話として生き続けるのではないかと思います。

また、お聞かせいただいた民話はいずれも、危機から生き延びる手段を伝えるものではなく、困難に対して自分ならどのように向き合うかを問うているものなのだと思います。自分の身に降りかかる運命について自分で引き受けていく姿勢こそ、これから生きる私たちが民話から得られる教訓なのかもしれません。

■大きな「復興」の物語とそこに住む人々の物語

1日目の夕食の場では、白河市で長年子育て支援に携わられている小磯さんにお話を伺う機会がありました。なかでも、放射線問題による二次的影響を受け、訳も分からず学校を転々とするようになった子どもたちのお話が印象的でした。関西にいる間は政府や大企業の動向などのいわゆる「大きな物語」ばかりが目に入っていましたが、それらによって住んでいた人たちの生きる道程が確実に変わっていたことを改めてしみじみ感じました。かき消されてしまいがちだが確かに存在する一人一人の「小さな物語」に、どう耳を傾けるべきなのでしょう。

4日目には、「おれたちの伝承館」の中筋さんに、車で小高区、浪江町、双葉町、大熊町を案内していただきました。小高区のとある区画は、一面が更地になったところに、大企業が最新のエネルギーについて研究する大規模施設が並んでいます。イノベーションを掲げ、革新的な印象を受けるこのあたり一帯は、小高の山を削った盛り土が利用されているとお聞きしました。さらに車で走っていくと、草むらの中にずらりと並ぶソーラーパネルや、突如現れる新しく大きな商業施設などが見られました。それらは先進的で美しい一方、どこか画一的であるように感じられます。



一帯に敷き詰められたソーラーパネル。

中筋さんは、大熊町のほとんど更地となった場所で、その地にかつて並んでいた店の写真を道路に広げながら、「全部なくなると思い出す手がかりもなくなる」とおっしゃっていました。ここに住んでいた人々が津波や原子力災害によって失ったのは、土地や建物そのものだけではなく、ここで営んできた生活であり、つないできた関係であり、歴史なのだろうと思います。今後、特に双葉町は「復興シンボル地区」として新たな整備計画が構想されているともお聞きしました。しかし、はたして復興とは、元いた住民の失われた物語を無かったことにして、新しい未来都市で上書きすることなのだろうか、と考えさせられました。



手前は中筋さんが撮影された写真。

写真に映るかつての街並みと現在の様子が対照的である。

5日目に訪問した、楢葉町の宝鏡寺にある「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」には、放射線被害という共通項を持つ4地域に関する資料が数多く展示されていました。一貫したメッセージは、「反戦・反原発」です。展示からは、原爆によって何もかもを奪われた子どもたちや、身体に一生残る影響を一瞬のうちに受けた船員たち、原発誘致によって明るい未来が保障されると信じて疑わなかった当時の市民など、原子力災害から

人々の暮らしが一変した様子を垣間見ることができます。事務局長の丹治さんからは、原発事故とは、かねてより防ぐ術が提案されていたにもかかわらず十分な対策を怠ったが故に生じた「人災」である、とお聞きしました。

続いて訪問したいわき市湯本の「原子力災害考証館」では、「人災」という強烈なワードの理由を目の当たりにしました。館長の里見さんからは、部屋の中で一際目を引く木村汐風（ゆうな）さんに関する展示について、お話を伺いました。汐風さんは、津波で祖母・母とともに被災し、地元の消防団によって捜索されていました。しかし、原発の爆発前に捜索が打ち切れ、以後5年7ヶ月もの間行方不明となっていました。父である木村紀夫さんは、公的な捜索が打ち切られたあとも自らの足で家族を探し続け、5年以上経ったのちようやくわずかな遺品を見つけ出されたそうです。考証館に展示されているのは、そんな汐風さんの持ち物の数々だといいます。



原子力災害考証館 汐風さんの持ち物が展示されている様子。

津波による被災だけならば、彼女たちは助け出されたかもしれません。事実、捜索中に彼女たちらしき声を聞いた隊員もいたといいます。しかし、原発事故前の捜索打ち切りによって、その救われたはずの命が救われなかったのである。展示からは、人災によって失われた命があることをまざまざと感じさせられました。

原子力災害とは、発生は一瞬だがその影響は何十年経っても残り続ける、ともお聞きしました。その上で、被害を受けた人々や土地に対して誠意ある対応とはどのようなものかと考えさせられます。それはおそらく、悲惨な事故を二度と繰り返すことのないように動くこと、そして安全に関する正しい情報を発信し続けることなのだろうと思います。

■ひとりひとりの人生

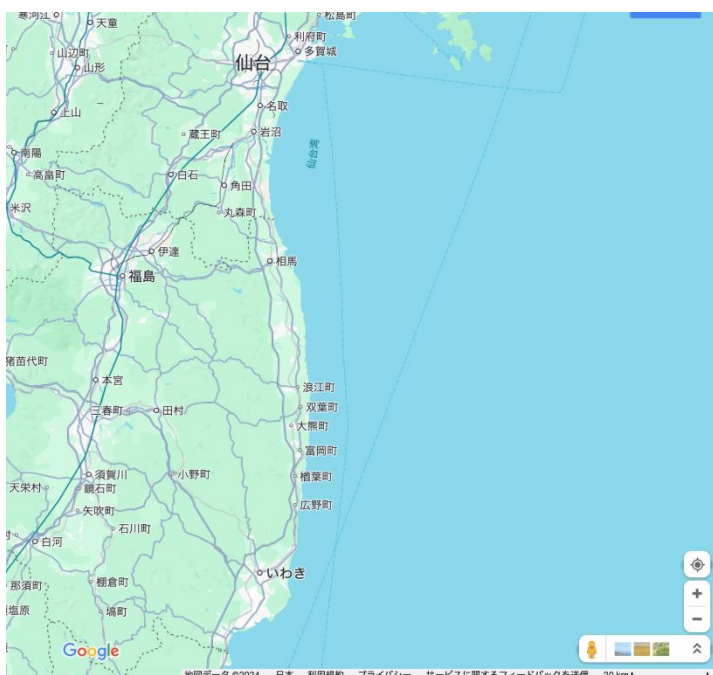
「大きな物語」の影に隠れてしまった「小さな物語」に、どのように目を向けるべき

か。そのヒントとなったのは、団先生の漫画展です。団先生の漫画展は、参加する方にとって、自分の物語を照らし合わせて考えを巡らせるきっかけとなっています。ある参加者の方は、ご結婚された娘さんや息子さんとの関係を漫画と重ね、世代間のコミュニケーションのギャップを埋めるためには「情」が大切である、とお話ししてくださりました。私も実際に団先生の漫画を鑑賞させていただくと、登場するどの例も、私自身と完璧に重なり合う人はいませんが、却って、人はそれぞれ自分の人生の物語を生きているのだと改めて感じさせられました。そしてまた、「普通」とされている社会のしくみが壁となり、選択を迫られる経験そのものに共感を覚えました。

団先生は、参加者の方が先生自身や先生の作品に唯一の正解を求めてしまうことがないよう、トークショーではあえて参加者の方との直接的な対話を避けている、とおっしゃっていました。一方向的な物語の提示によって、受け止める側に考察の余白が生まれ、時間をもとにする他の参加者や自分自身との新しい対話が起こる。そうしてそれぞれの読者が、自らの人生に立ち戻り、自分なりに納得のいく選択を探ることが重要である、ということなのだろうと思います。漫画展やトークショーは、レジリエンスとも呼ぶべきその「立ち向かう力」が呼び起こされる場となっているのだと思いました。

思えば、「おれたちの伝承館」や民話の会も、人生の物語を表現する場としての役割を果たしていたのではないかと思います。そして、その物語に触れた人々が、思いを馳せ、自分の人生について振り返り、新たなアクションを起こす。「小さな物語」に耳をすませるには、そのような表現の場と、支えるあたたかな人々の輪が大切なのだと思いました。

最後に、このプロジェクトで出会い、たくさんの物語をお話ししてくださった皆さま、そしてこのような貴重な出会いの場をつくってくださったすべての皆さまに、改めて深く感謝申し上げます。



東日本・家族応援プロジェクト学外実習における事後レポート

立人間科学研究科 実践人間科学領域 M1 竹谷 恵

はじめに

このプロジェクトに参加する前、事前学習を通じて、地震や津波、そして原子爆弾と原子力発電の仕組みとその現状について私なりに調べたが、実際に現地に行って、復興作業は進んでいるものの、現地の方の「語り」を通じて、どれほど影響を受けたのかを知ることができた。活動内容ごとに、私が感じたことを述べたいと思う。

東日本・家族応援プロジェクト＋（プラス）2024 in 白河 団先生の漫画トーク

会場設営を地元の学生ボランティアと一緒に準備し、団先生の講演が始まった。

私は初めて団先生の漫画に触れたが、題材が身近で、先生は結論づけたり、質問をさせたりするようなことはせず、読んだ人がそれぞれ感じさせるような進形で、私も自分の立場に置き換えて考えることができた。

「うたとあそびとおはなし広場」

司会の小磯さんを中心に、参加した子どもたちと一緒に楽しく参加することができ、子どもたちが飽きないように、様々な工夫がされていて、大人も楽しめることができるプログラムだった。

ここで知り合った親子が顔見知りになって、別の機会で会えた時、会話が広がると感じた。

一緒に参加した地元の学生ボランティアから、「人口当たりの大学生が少ない福島では、大学院生と触れ合えて、良い機会だった。」と述べていたことが印象的だった。

多賀城実行委員会メンバーとの懇親会(多賀城)

メンバーで、元市役所職員である丸山さんから、震災直後の避難所の運営についてお話を伺った。

丸山さんは、震災の情報はラジオを通じて得られていたので、ラジオは信頼できる情報ツールだと認識した。

避難所の体育館では区画整理をして、皆が使いやすいように工夫し、トラブルもあったが、被災者をも巻き込んで、全員で分担し、職員にも休憩を取らせて運営されていたことは、丸山さんが被災当事者で、信念のある強いリーダーシップがあったからこそ秩序を保



ち、生活することができたのだと思う。いただいた資料は本当に参考になった。

東日本・家族応援プロジェクト+（プラス）2024 in 塩竈・多賀城

イベントが始まる前に、丸山さんから津波被害を免れた「奇跡の紙芝居」を見せていただいた。

愛くるしいパンダを題材にした紙芝居は、パンダの色や形を変えてみる等、奇想天外なお話で、大変面白かった。本当に津波で流れず残っていて良かったと思う。

岡先生の漫画トーク

この会場では、廊下等、多くの先生の作品が飾られていて、会場を訪れた人々が誰でも気軽に読めるようになっていた。

参加者と一緒に漫画トークの議題である「夢」について会話をしたが、「夢をたくさん見られる、追いかけることができる世の中になってほしい。」と話されていたことが印象的だった。



JR 常磐線に乗車し、新地駅へ

車窓は、津波の影響を残すものは何もなく、単線の路線をひたすら南に向いて走った。

新地駅は、とても新しく綺麗で、駅の横に温泉施設やホテルがあったものの、それ以外は広大な土地が広がっていて、綺麗に整備されているのに、もったいない気がした。

津波の被害を二度と受けないように、土地が嵩上げされているのがはっきりわかった。

みやぎ民話の会（新地）

ここでは、100歳の小野さんのお話を聞くことができた。

東北でも今年は高温が続いており、そんな環境にも関わらず、私たちのために集まっていたことは大変ありがたかったと感じた。

さて、小野さんが話し始めると、すごく大きなはっきりとした口調で、とても100歳とは思えない熱量で話していただいたことが強く印象に残った。

「鹿狼山（かろうざん）」の話は地元の伝説を、情景が浮かぶように話しておられたので、想像することができて、楽しかった。

しかし、小野さんの津波の被災状況、家の柱が南と北に大きく揺れて、タンスに挟まりながら必死に耐えて、津波が家財をみんな持っていかれたことについて、

「片付けをしないと神様が言って、持って行かれた。」

と話されていたので、状況は悲惨であるが、前向きな考え方に感嘆した。



紙芝居での伝承（新地）

紙芝居の木枠は広島から送られたものであるが、同じく広島と福島と同じ島がついて、放射能の影響を受けている都市として、何か運命のようなものを感じた。

今まであまり語られていなかった震災直後の「朝日館 女将の7 DAYS」は大変貴重な悲しいお話だった。紙芝居が終わった後、「昔同じような津波があったが、この体験を紙芝居に残しておけば、この教訓を伝えることができた。」とお話しされ、過去の被災を教訓に、未来に生かす「伝承」は、川島先生も言われていたが、

伝承が一番の防災になる

と感じた。



おれたちの伝承館(小高)

様々な原発事故に関する美術作品が展示されており、どの作品からも衝撃を受けた。

入り口に、私が福島原発事故後の写真集で衝撃を受けた

原子力 明るい未来の エネルギー

という看板を詰って、事故後の原子力発電所について、様々なキャッチコピーのような作品があり、それぞれの想いが描かれていた。その中で私が印象的だったのは、

核のゴミ 未来に残すな 負の遺産

というもので、原子力発電は「明るい未来のエネルギー」と信じてこられたが、結局「負の遺産」を残した結果となってしまった。

その他の作品の中では、チェルノブイリがあったウクライナとの交流の中で、菓子のオブジェが飾っており、それはニュースで見たことがあったので、それを目の当たりにすると、放射線に関する病気は、一生付きまとうという現実を突きつけられた。

次に、運営者の中筋さんが撮影した巻き物の写真を通じて、建物を壊す前の街の風景を見ながら、ここにはかつて、人がたくさん暮らしていて、平穏な営みがあったことを証明するものだった。

庭に、「矢印のオブジェ」が造られており、その矢印の先が、福島第一原子力発電所を指しているのは、街が復興しても、

福島原発事故を忘れるな、俯瞰して物事を見ろ

という中筋さんの執念のような、強い気持ちがあるのではないかと感じた。

唯一和んだことは、絶滅危惧種だったが、土地を掘り起こして出てきた

ミズアオイ（花言葉 前途洋々）

を中筋さんが愛しておられる様子が、ホッとしました。



商工会女性部の皆さんとの懇談(小高)

皆さんのお話を聞いて、震災で大変な目に遭っているにもかかわらず、たくましく、前向きに生きておられる様子を感じ取ることができた。

震災から5年後にやっと戻ってきて、その家の片付けに苦労された話や、商売を始めても

以前の客が来ない、自分が高齢で後継者がいないという問題が重くのしかかり、復興を躊躇してしまう現実があることを知った。

そして、おれたちの伝承館の土地と建物が、商工会の方の紹介で開館することができたことから、ご縁とその人間のつながりがあれば、何か次につなぐ活動ができると感じた。

毎日、衣食住全て

放射能の線量に注意を払いながら、生きておられることは、私が大阪で毎日そのようなことを全く気にせず暮らせていることが、いかに幸せなことなのだという事も感じた。



震災遺構浪江町立請戸小学校(沿岸部)

ここは本当に衝撃的だった。二階建ての校舎で、一階は津波で全て破壊されていた。

現地に行って、津波の破壊エネルギーと、子どもたちが逃げた場所までの距離を目の当たりにして、人間は自然には逆らえないものだと感じた。

但しここは津波だけでなく、原発事故の影響から長年戻ることができなかったことから、突然慣れ親しんだ小学校に行けなくなり、勉強道具や何もかもが取りにいけないことは、本当に辛かったであろうと思う。



東日本震災・原子力災害伝承館(沿岸部)

ここでは原発事故発生の時系列と、反省、教訓、そして未来に向けての取り組みが展示されていた。企画展で、なぜ爆発していない2号機の放射能が一番大量に漏れたのかの理由を解明することができた。

そして、語り部の方の辛いお話を伺ったが、正しく、全員に情報伝達をすることは、大変難しい。震災発生時は想定外のことが起きたため、皆パニックが起ってしまったのではないと思う。その後の「命の選別」の話は、本当に辛かった。

原発事故は人々の暮らしを分断し、辛い選択を与えるばかりとなってしまった。

今後も、放射能が与える影響は計り知れない。

福島第一原子力発電所廃炉工事の外観（沿岸部）

私は、このプロジェクトに参加するまで、あまり原発事故に関して深く考えて来なかったが、参加することが決まってからは、原発に関するニュースや特集があると必ず視聴ようになった。

以前 NHK の「100 カメ」という番組で廃炉作業の放送をしていたが、熱中症になってしまうような防護服を着て、ゴーグルで視野が狭くなり、放射能が降り注ぐ時間制限がある中で、あのような過酷な作業をされている映像を初めて見た。

誰かがやらなければならない作業である。

まだあそこには、大量のデブリが眠っているわけで、またいつ福島に津波や地震が起こるかもしれないリスクがある中、再び漏れ出すと大変なことが起こってしまう。

見えない放射能と戦う日々があそこで行われていると思うと、すごく悍ましいと感じた。



フレコンバック（除染廃棄物）～黒い袋（沿岸部）

あの黒い袋が並んでいる光景は、本当に異様だった。

今回のプロジェクトで一番衝撃を受けた場所だった。

村本先生が嘆いておられたが、本当に

醜いもの、人間のエゴ、悲しい塊

だと思った。

「未来のエネルギー」の末路がこれか・・・と一番現実を突きつけられた。

あの場所の存在をほとんどの人は知らない。

日本人として知っておく場所だと感じた。



富岡復興メガソーラー・SAKURA（沿岸部）

想像以上に大量に太陽光パネルが設置されていたので驚いた。

一般見学用に見晴台もあり、全体が見えたが、昔ここで梨や田んぼされていた先祖代々の土地があったことが全く想像できなくなっていた。

そしてこれら大量の太陽光パネルも何十年後には寿命を迎え、いずれ産業廃棄物として処理される日が来る。

しかしこのメガソーラーに見学に来た、未来のある賢い高校生や大学生たちが、電力に関する解決策を発明してくれることを期待したい。



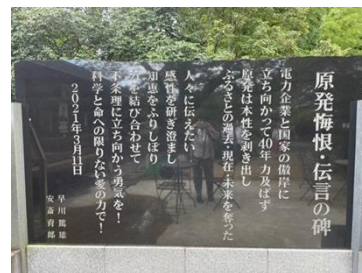
宝鏡寺～伝言館（沿岸部）

伝言館で安齋先生にお会いできなかったことは、とても残念だったが、事務局長の丹治さんのお話を聞くことができた。

丹治さんの言葉は力強く、信念を持って、語られていることを感じた。

そして、安齋先生が作成したパワーポイントや、学生時代から研究されている放射能に関する資料を読み、その恐ろしさについて、再認識することができた。

原子力発電所について、自分の目で調査し、自分なりの意見を持つておく必要性を感じた。



原子力災害考証館（いわき市）

考証館では、古滝屋当主の里見さんの、「一人の人間として、福島で起きたことを残したい。」という気持ちを聞くことができた。

この考証館は、里見さんの意思に共感した人々と一緒に、2011年の3月12日、福島第一原子力発電所が水素爆発を起こした10年後に設置され、地元の観光ルートに組み込まれたことは、いわき市にとっても大切な施設であると捉えられていると思った。

展示の中には、震災で亡くなった木村汐風ちゃんの遺品があり、娘を持つ母として、本当に胸が痛くなった。

親であれば、たとえその場に放射能が大量に降り注いでいても、探しに行っていたと思う。しかしそれが出来なかった。最後に汐風ちゃんに会った人が、「声が聞こえた」と聞けば、余計に

早く助けに行けば、助かった命だったかもしれない・・・

と思うと、お父さんである木村さんの悔しさは計り知れないと感じた。

もし汐風ちゃんが生きていたら、今日訪れた若い大学院生の皆さんと同世代だったので、木村さんが、「もし汐風が生きていたら、大学生になって世の中の課題を研究していたかもしれない。」と話されたいたことに対し、生きている私たちが頑張ることや、汐風ちゃんが生きた証を目撃したことで、命を大切にしたいと感じた。



おわりに

「ピーピー」今でも放射能線量計の一定数を超えると鳴り響くあの音を思い出す。福島県周辺の人々は今でも衣食住において、線量計を見ながら生きておられる。大阪では感じ取れない感覚だった。

このプロジェクトでは、多くの方の「語り」を聞くことができた。

それは、先生が震災以降 10 年以上対人援助を続けてこられたからこそ得られたもので、私も被災と復興の witness（証人・目撃者）の一人になれたと思う。

その「語り」において、見た目では、復興が進んでいるような情景であるが、現実には、なかなか元の生活に戻れず、苦勞されており、特に福島県は東北大震災以後、人口減少率が高いことは、間違いなく原発事故が影響していることが、現地に行って、はっきりと分かった。

このプロジェクトに参加して得た経験を、他の人に伝えるとともに、この「語り」から得た学びを、いつ起こるか分からない次の大地震に備えていきたい。



東日本大震災と初めて知ったこと

人間科学研究科 実践人間科学領域 M1 南花音

はじめに

今回の東日本家族応援プロジェクト+（プラス）では、画像1に記載している地域に赴きました。福島県から始まり、宮城県を訪ね、そしてまた福島県に戻るルートでした。今回の実習で、実習に行く前には知り得ることがなかったことを多く経験することができました。ここでは、赴いて初めて知ったことを中心に記載していきます。



画像1 今回の実習ルート

白河で学んだこと

白河市では、白河市立図書館で東日本家族応援プロジェクト+（プラス）を開催しました。午後のうたとあそびとおはなしのひろばというプログラムでは、小磯さんと鳴島先生が前に立ち、様々な遊びを教えてくださいました。お互いのつながりをより強固なものにしたものは、親や子どもすべてを巻き込んでお互いにコミュニケーションをとる遊びであったと考えます。私がそう感じた理由は、最初は参加者とはあまり目も合わずに、目の前でやられている遊びを見するという過ごし方を各々が行っていましたが、全体を巻き込む遊びを行った後はアイコンタクトが増え、お互いに話しやすくなっており、参加者同士でも談笑が行われるようになっていたからです。遊びという枠組みでコミュニケーションをとることで、つながるハードルを下げる事が可能になり、一気に空気が和やかになったように感じられました。また、反省会で他の院生が話していたように、私自身も支援関係なく純粋に心から楽しむことができ、そのような気持ちがなによりつながり構築や良い空間には重要であることに気づきました。



画像2 白河での午後のプログラム

塩釜多賀城で学んだこと

多賀城では、丸山さん、黒川さんらとお話しさせていただく機会があった。丸山さんから、東日本大震災が起きた時、市役所職員であったこともあり、避難所の統括をしていた時のお話を聞かせていただいた。聞いているだけでもとても大変だったことは伝わってきました。避難生活が明けて、別の場所で避難所にいた人と偶然会った時に「あの時はありがとうございました」と感謝を述べられたとお話ししてくださいました。それらのお話を

聞いていて、津波地震を共に生き抜いたという意味合いでの仲間意識がとても強く感じられました。

新地で学んだこと

新地では、みやぎ民話のお会の方から民話や東日本大震災が起こった直後の話を教えていただきました。小野トメヨさんから、「鹿狼山と手長明神」と「早川の長者」、「娘の嫁ぎ先のおばあさん」のお話を聞かせていただきました。2つの民話は、最終的に実際にあるものとのつながりがあることを示す終わり方をされていて、完全フィクションのみのおとぎ話ではなく、実話が混じっている点がとても重みのある話であると感じました。トメヨさんのお話の仕方はとても引き込まれるもので、実際に見たことがない聞き手の私たちもしっかりと情景が思い浮かんできました。民話のお話をされている時はとてもハキハキお話しされており、民話をとても大切にされていることが分かりました。



画像3 トメヨさんの3つの語り

その後、村上さんが「朝日館 女将の7DAYS」という、東日本大震災が起こった直後の村上さんの7日間の行動を紙芝居で分かりやすくお話ししていただきました。この紙芝居を見聞きして、語りは防災であるということをととても理解することができました。そして、紙芝居という形式ももちろんのこと、やはり被災されたご本人に直接語っていただけているというのが一番心に残る要因であるとも考えました。村上さんの「すぐ避難することを子どもから教えておくのが大事」「自分が自分を守る」というメッセージからも分かるように、生きていくための深い知恵という、机の上の学びではない、直接自分の生にかかわる学びをすることができたと感じました。



画像4 村上さんの紙芝居

小高で学んだこと

おれたちの伝承館では、中筋さんからパノラマ写真を見せていただきました。「ただの更地ではない、人々の生活があった場所だったということを伝えたい」とお話ししてくださいました。お腹を空かせた牛は柱を食べてまで生き残ろうとしましたが、亡くなってしまったお話では「もの言わぬものたちの被害に目を向けてほしい」というところが伝えたい点だとおっしゃっていました。たしかにそこには人々と暮らしていた動物や自分自身の生活を営んでいた動物がいたことは当たり前のはずですが、そこに気づきませんでした。

メッセージを発しないものの情報に気づいてたどり着くのがとても難しいことであると示されているようでした。そして、中筋さんは「コンセンツの向こう側を考えてほしい」とおっしゃっていました。それを聞いたとき、普段私たちが使っている電力を供給している関西電力について、福井県の原子力発電所についてのほとんど知らないことに気がつきました。そのため、私は自分が使っている電力が発電所の周辺にある建物やそこにいる人々、生物たちにどんな影響を及ぼす可能性があるか知ろうとすることが第一歩であると考えました。しかし、私たちが被災地から離れれば離れるほどそのような大事なメッセージや情報とかかわる機会がありません。私がそうだったように、事故の影響を受けていない人々は同じ日本にいるにもかかわらず問題について考える意識がかなり低いと考えます。このことから、私たちが被災地で様々な方から聞いたお話や教訓を別の地域に伝えていく媒体となる必要性を改めて再確認しました。

その後、商工会女性部の皆さんから、小高での被災についてお話を伺いました。部長の方が「安全な食べ物が欲しい」「測定することが大事」とお話しされていました。それは福島



画像 5 商工会女性会の方々

浪江町・双葉町・大熊町の浜通り震災視察ツアーで学んだこと

浪江町に入ったとき、中筋さんから「何をやるにも踏みとどまらないといけない」とお話があり、「それを知らない人々にどのように伝えていくかという問題も課題だ」とおっしゃっていました。裏を返すと、除染が終わっているとされている地域とはいえ、風や雨、鳥が除染のされてない山で食べたものをフンとして落とすことで、まだらに放射線量が高い物がそこら中にあるということを知っている元いた住民の方々は戻っては来ないということだと思いました。それはやはり放射線の怖さを知っているからこそその判断であるということ

その後、津波の被害にあったままの状態であった請戸小学校を見に行きました。1階は何もなく、はがれた壁とはがれた床がひろがり、はがれた天井からぶら下がる数本のケーブルが海風に吹かれてゆっくりと揺れているだけの風景に、しばらく虚しさを感じました。白河や新地、小高、浪江など様々なところを見に行きましたが、ほぼすべてが一新されていてきれいだったため、震災当時のことが全然分かりませんでした。請戸小学校を見て初めて、こんなに重たい調理場の台や機械が一室に詰め込まれるほどの威力が津波にあるということを知り、頭だけではなく身体感覚で理解しました。震災を経験した人々の思いとは別に、震災がどれほど怖いものであるのかという状態を理解するためには、百聞は一見に如かずというように、実際に自分自身が足を運んで見に行くということが効果的であると考えました。



画像6 請戸小学校の1階

伝承館で学んだこと

伝承館では、語り部の高村さんが『25kmに住む一人として』というテーマで震災直後の話をお聞かせいただきました。原子力発電所から20km圏内は避難区域、30km圏内は避難準備区域、30km圏外は何もないという区分がなされたことを「命の線引きだと思った」とお話しされていました。国がそのように区分したのはすべて金銭的な問題であり、このような簡易な区分けで汚染がとどまるわけではないはずなのに、賠償金の資金の問題で区分され、地域の分裂が起こってしまったとお話しされていました。地域がぶつかり合うのではなくて本当の主張の矛先は国や東京電力であるけれど、なかなか言えない人々が多く、その矛先は弱者に向き、目に見えない小さなDVもあったとおっしゃっていました。私はこの話を聞く前まで、そのような現実とは全く想像が付きませんでした。原発事故の影響への思いの矛先は国や東電に向いていると考えていましたが、実はそうではなく、賠償金を多くもらえる住民とそうではない住民の間で大きな亀裂が入っていたことを今回初めて知りました。そのような住民の同士の話は、私たちが福島県を訪れなければ、遠く離れたところに住んでいる私たちの目に触れることはない事実であり、原発事故は除染問題以外にも様々な問題を生んできたことを改めて認識することができました。



画像7 高村さんのお話

いわき古滝屋考証館で学んだこと

考証館にて、古滝屋のご主人の里見さんからお話を聞かせていただきました。里見さんがお話を聞いてきた人から「私たちは（実名をだして）言えない。私たちの声を持って行って話ししてください」と言われたけれど、同時に福島県の風評被害と言われることを考え、ためらっていたという。しかし、起きたことを残しておきたいという理由で考証館をご自身の旅館に設置したとお話ししてくださいました。これを聞いて、私たちも伝え方を誤れば、福島県はまだ放射能に汚染されていて危ない県であるという風に受け取られてしまう可能性があると思いました。そのため、除染作業がまだまだ終わっていない事実がありながらも、国や東京電力の行ってきた真実、行ってこなかった真実、原発の影響を受けた人々がどのような困難、思いを抱えているのか、人目に付きにくい事実までしっかり合わせて伝えていくことが重要であると考えました。



画像 8 里見さんのお話

おわりに

今回の経験で、現地に赴いて初めて知ったことが多くありました。まず、新地の方からお聞きした震災直後のお話と前日の多賀城で出会った丸山さんの震災直後に避難所の統括として動いていたというお話を併せて考えると、被災体験は千差万別で一人一人にどう思うでいたか、どのような使命をもっていたか、どのように活動していたかについて知るのは本当に深い領域であるということでした。そして、東日本・家族応援プロジェクトで今回運営側の人間として参加させていただいて、これらのイベントを必要としている人がおり、誰かと誰かをつなぐ役割を果たすと知りました。対人援助の観点では、このような場所で行われるイベントにもっと着目すべきであると考えました。また、今回の実習で津波地震についての印象が最も残ったのは請戸小学校でした。その当時の建物を見学することができたことで、津波が如何に怖いものであるのかを理解できました。さらに、原発に対する人々の思いに関して、津波地震だけではなく、人災である原発事故も起こった福島では、様々な人々のお話を聞いたことで、原発の影響を受けた人々の表面には出さない奥底にある感情がとても強く激しいように感じました。

福島県を出て関西に帰ってきたとき、私の身近な人々にさっそく私が見聞きしてきたこと、感じたことを伝えました。そうすると、その場にいた多くの人が「福島県の大部分はもうすでに復興していると思っていた」「(原発事故の影響は) 終わっていると思っていた」という話をしていました。しかし、私の話を聞いて「理不尽という言葉を超えている」と話すなど、とても真剣に原発事故の影響を受けている人々について考える様子もありました。現地に行ったら様々なことを知った今だからこそのわかることではありますが、こちらに帰ってきて、

実習に行く前の私のような人々がとても多いことが改めて分かりました。福島県の津波の被害や、元の街は戻ってこないこと、今現在でも帰還困難区域があること、争わなくてもよいはずの住民同士の亀裂、除染は終わらず住民の方が何気なく生活されている区域でも高い放射線量があるものと隣り合わせで生きていること、現地へ赴いて初めて私が知った事実をこれからも伝えていかなければならないと考えました。

今回、現地に行くにあたっての目的は、主観的な観点に重きを置き、震災を身近に感じた人々の生活がどのように変わりどのような思いで震災に向き合ってきたのか、震災の影響を熟知している方のこれからの震災に対する思い、事前学習での俯瞰と実習での主観的視点での学びの差に気づくことでした。先述した学んだことに記載した通り、これらの目的は達成することができました。この実習で私がお会いした方々は自分自身が経験したことを赤裸々に語ってくださいました。このプロジェクトの事前レポートで、福島県の世論調査（福島民報、2024）を調べた際に、震災・原発事故の教訓や記憶が風化していると感じている福島県民の方が多くいると示されていました。実際に福島県に赴いたとき、街並みが一新されていたことや、元の住民の方があまり戻ってきていないこと、現地に行かなければ知りえなかった情報が多かったという点から、私の主観的な視点でも風化していると感じ、その結果に納得がいくきました。風化を感じる場面についても、「震災と原発事故の話題が減った」「国の復興支援取り組みが減退」「県外に理解されていない」がいずれも 20%であったため、これらの客観的な数値と私が今回経験してきた主観的な皆様の物語を合わせても、過去の経験や現在の実情を教えていただけた私たちが声を運ぶ役割を担う必要があると思いました。今回の実習で様々な経験をさせてくださった皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

引用文献

福島民報（2024）．震災・原発事故 13 年 福島県民世論調査 東日本大震災原発事故の教訓や記憶「風化」77.6% 正確な情報発信必要 福島民報 Retrieved August 17, 2024 from [【震災・原発事故 13 年】福島県民世論調査 東日本大震災と原発事故の教訓や記憶「風化」77.6% 正確な情報発信必要 | 福島民報 \(minpo.jp\)](https://www.minpo.jp/news/2024/08/17/001)

東北での学び

実践人間科学研究科 M1 CHU Yulu

今回のプロジェクトにおいて最初から最後まで、証人として物語の裏にある辛い思い出を実感することができた部分とできない部分があるかもしれないが、これらの語りを聞いて、互いに感想をシェアし、その些細な変化を証明することができた。私の目を見たこと、私の手で触れたこと、カメラで撮れたことを踏まえ、考えてきたことを少しまとめてみた。

伝承はさまざまな形式がある

東日本大震災をテーマにした語りでは、様々な形での伝承が行われていると気づいた。当地の方たちの口から直接語られたこと、紙芝居や展示物、絵や写真といった視覚的・聴覚的な媒体を通じて、震災の記憶を後世に伝えようとする多様な形があると感じられた。それぞれ異なる形式でありながら、共通して「記憶を共有する」ことを目指している点でつながっている。

たとえば、白河市で行われた「うたとあそびとお話の広場」では、手遊びや昔話が用いて、参加者同士が触れ合いながら楽しむ姿が見られた。昔から続く口承文化の一部であり、口伝えによって地域の歴史や人々の経験が伝えられてきた。特に、子どもたちを対象とした活動では、遊びや物語を通じて伝承される文化や価値観が重要だと思った。

また、アウシュヴィッツ平和博物館や民話の会での活動でも、展示や語りを通じて過去の出来事が語り継がれている。これらの形式は、展示物や肉声を通じて感情に訴えかける力を持ち、自分に深い印象を残した。伝承館での展示物は、文字や写真、遺物を通じて視覚的に過去を伝える一方で、民話の会では村上さんが自らの声を使い、紙芝居に合わせて自分の物語を残した。これらの努力は、伝承が「記録」だけでなく、直接的な「対話」や「経験」によっても行われると理解した。

肉声に生きる物語の力

プロジェクトの中で特に印象的だったのは、語り部の話が自らの声で震災体験や民話を語る場面であった。肉声で語られる物語には、その人の感情や体験が強く伝わってきて、本などの文章とは異なる「生々しい力」が宿っている。村上さんが語った紙芝居『女将の7days』は、まさにそうだと思った。村上さんが自身の経験をもとに作った紙芝居は、絵や文字だけでなく、自分の声が聞いている私の心に直接訴えかけるように感じていた。物語に感情がこもることはより深く共感し、物語が持つ力を感じることができた。

また、今年100歳になる小野トメヨさんの民話『鹿狼山』が紹介されて、トメヨさんの語りには年齢を感じさせない迫力を感じる。こうした年配の方が語る昔話は、今ではなかなか聞く機会が少なく、その一言一言には長年の語る経験と気持ちが染み込んでおり、単なる「ストーリー」ではなく、まさに演じていると感じた。

紙芝居や口頭での伝承は、物語の力を最大限に引き出す手段だと思った。紙芝居という形式は視覚的な要素に合わせて、何よりもその魅力は「肉声」で語られることだと思う。物語はただの出来事ではなく、語り手の心に深く刻まれる経験でもある。このような「肉声に生きる物語の力」が、伝承の中で重要な役割を果たしていると思った。

同じ出来事であっても人々によっては違う視点

東日本大震災に関しては、被災地に住む人々、支援に関わった人々など、さまざまな立場の人は異なる視点や感情があるとわかった。震災の規模や被害が範囲によって、人々がそれぞれの立場や状況で異なる体験をしたから。

今回のプロジェクトでは、たくさんの語りを聞いて、ツアーで見学もできたが、現地の人と全く同じな感想はできない部分があると気づいた。根本的な原因は、語りを聞いても、見学をしていても、実際に経験していないから、想像だけではできない部分がある。2011年3月11日は、家や家族、地域など、自分の生活基盤が津波や地震によって一瞬で失われ、日常生活が一変した時点とも言える。その後の復興は単なる「建て直す」ではなく、自分たちの生活を取り戻すための長い闘いでもあると思った。

一方、外部から訪れた私にとって、被災地は非日常的な空間として目に映ることが多い気がした。震災のニュースやメディアを通じて事前に情報を得ているけど、実際に被災地を訪れることで、初めてその現実の厳しさに直面した。しかし、今回のプロジェクトでも、被災地の現状を一時的に見ているに過ぎないと思った。そのため、津波後に建てられた防波堤や再建された建物を見て「復興が進んでいる」と感じることもあるけど、実際には被災者にとってまだ復興は終わっておらず、14年経っても生活の不安や傷跡が残っているという現実がある。この「復興した」という外部の視点と、「まだ終わっていない」という被災者の視点のギャップは、震災後の長い年月が経つ中でも埋められない部分が多いのではないかな。ここまで思ったら、これからの毎年のプロジェクトにも参加していこうと決意した。

同じ東北地方でも異なる視点

同じ被災地に住む人々の間でも、視点には違いがあると気づいた。たとえば、高齢者にとっては、震災は長年住んできた地域での生活を崩壊させた。高齢の方たちは、震災後も地域に住み続け、震災の記憶を語り継いでいる。この方たちから、震災で失われたものだけでなく、残された地域のつながりや記憶を語り続けようという使命感を感じた。自分の経験や民話を語ることを通じて、若い世代に震災の経験を伝えようとする姿が誰よりも強いと思った。

一方で、若者世代にとっては、震災後に地域に残り続けることには困難さがあると思った。震災後には、復興が遅れている地域では、仕事や進学が機会が限られているため、多くの若者は都市部に移り住むことを選んだ。白河市でも、福島沿岸部でもそのような傾向を見えた。高齢者が地域に根を下ろして復興を支える一方で、若者が地域を離れざるを得ないとい

う現実、被災地における世代間のズレを感じた。

震災の記憶と忘却

震災から14年も経過し、被災地にとっては「震災の記憶をどう残すか」という課題が浮かび上がっていると感じた。復興が進む一方で、外部からの関心が薄れ、「忘れられた」と言う話をよく耳にした。小磯さんが言った「まだ私たちを覚えていてくれる人がいるんだ」という言葉がすごく印象的だった。震災当初は全国的な支援が集まり、被災地に対する関心が高かったけど、時間が経てその関心は薄れた。現地にとって「復興はまだ終わっていない」と感じる時はよくあった。

一方で、外部の人々や次の世代にとっては、震災は過去の出来事として徐々に「忘れられる」ときは必ずくると思った。その経験と記憶をどう伝え続けるかは、今後の課題として残される。民話や紙芝居、手話、絵、写真など、さまざまな伝承の形が試みられている。これらの努力は、震災を「過去のもの」としてではなく、「未来に生かすべき経験」として捉え直していると実感した。

まとめ

今回の東日本プロジェクトは、震災の記憶や復興への努力に触れる貴重な経験でした。東北地方での生活や地域の復興に対する人々の多様な視点が強く感じました。特に、震災の経験を未来に伝えるために、語り部や紙芝居などの口承文化が果たした重要性を改めて学びました。また、被災者が震災から14年以上経過しても、復興に向けた努力を続けている姿に触れ、復興は単なる建物の再建だけでなく、人々のレジリエンスや地域のつながりを取り戻すプロセスでもあると実感できました。この経験は、災害や戦争が人々に与える影響の大きさや、その後の復興に向けた長い道について、改めて考えるきっかけになりました。震災の記憶を風化させず、次世代に伝えていくことの重要性を強く認識し、自分自身の学びをこれからも活かしていきたいと思います。来年度にも、ぜひ参加させていただきたいと思います。



アウシュヴィッツ平和博物館



アンネ・フランクギャラリーのドアの隣にある千羽鶴



TSUTAYA 書店の入り口



漫画トーク会場



新地の町



小野トメヨさん



女将の7 days



双葉屋旅館



手遊びを演じている小磯さん



桃太郎を演じている鳴島さん



おれたちの伝承館



館長の中筋さん



長ーい防潮堤



震災遺構 請戸小学校



夜ノ森駅向こうの自販機



夜ノ森駅の近くの土地の放射線量

「東日本・家族応援プロジェクト+2024」に参加して

博士課程後期課程 河野暁子

2018年から継続的に参加してきたプロジェクトに、今年も参加した。台風10号接近のため新幹線が計画運休するなど、予期せぬこともあったが、自分ができることをやっていくという本プロジェクトで学んだことを活かし、行動できたと思う。東北の天候は良く、全ての行程を滞りなく終えることができ、多くの方々と出会えたことに感謝したい。

白河のプログラムでは、午前中は団先生の「漫画トーク」、午後は「うたとあそびとおはなしの広場」を行なった。台風でプロジェクトに来られなくなった鶴野先生の代わりに、白河のママカフェを主催している小磯さんが、歌や手遊びを仕切ってくれた。小さな子連れたい若い夫婦、ご年配の女性たち、高校生のボランティアの方たちが参加し、とても楽しい時間となった。

翌日は多賀城プログラム実行委員会の丸山さんの取りまとめで、塩釜の会場で団先生の「漫画トーク」を行なった。大勢の方が聴きにいられていた。家族の漫画を題材に、参加者と話す時間もあり、自身の家族をふり返ったりもした。午後は新地に向かい、みやぎ民話の会の企画で、100歳の小野トメヨさんの語りを聴いた。新地に伝わる民話や震災のお話で、お声がとても力強いのが印象的だった。また旅館をされていて震災で避難された村上さんによる紙芝居もあった。地震の怖さ、避難の物々しさや緊張感、その中での不思議な体験が心に残った。

3日目は、南相馬市小高にある「おれたちの伝承館」を見学し、中筋館長のお話をうかがった。写真家である中筋さんの長い巻物写真を広げるパフォーマンスから、原発事故で失わ

れたものがあまりに多すぎると感じ、胸が詰まった。その後、宿泊した双葉屋旅館に戻り、小高の商工会女性部の方たちのお話をうかがった。小高は原発事故後避難区域に指定されていて、みなさんあちこちへ避難されていたそうである。お父様が透析を受けられる病院を探したり、そのお父様も「小高へ帰る」と亡くなるまで毎日言っていたりという話を聴き、原発事故後の避難の厳しさを感じた。1年後に自宅へ戻ると、ネズミが大量にいたということだった。個人で対応していくことが、どれほど大変だっただろうと想像した。

午後からは、中筋さんの案内で視察ツアーが行われた。浪江町の福島イノベーションコーストによる工業地帯は、人が住まなくなった土地に最先端のテクノロジーが入ってきている。なんとも空しい気持ちになった。震災遺構の請戸小学校を見学し、「東日本大震災原子力災害伝承館」へ向かった。そこでは語り部の講話を聴かせていただいた。偶然ではあるが、2019年に伝承館が開館して1週間後に私が訪れた際、お話を聴かせていただいた方であった。またお話をうかがえたことが嬉しかったのと、一度でも原発事故が起きると、こんなにも影響が大きく、また長く続くのだと改めて感じた。伝承館を後にし、かつて大熊町の商店街だったところを訪れた。ここでも中筋さんが巻物写真を広げてくれて、かつての街並みと荒れた空き地になった土地の比較ができ、あまりの違いに言葉が出なかった。

最終日は再び視察ツアーである。夜の森の桜並木は避難区域であったため、手入れがされず幹がねじ曲がっていた。夜の森駅周辺は整備が進んでいたが、一歩草むらに入ると放射線量が高かった。富岡町のメガソーラー発電所へ向かい、担当者からお話をうかがった。元々田畑だった土地を除染し、メガソーラーが建てられた。20年後に農地にできるとのことだが、若者は町の外での生活が定着しているとのことだった。その後、楡葉町の宝鏡寺にある「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」を訪ね、事務局長の丹治さんのお話をうかがった。原発は核であること、誰にも平和に生きる権利があることが心に刻まれた。最後の訪問先は、いわき市の旅館古滝屋にある「原子力災害考証館」である。何度も訪れた場所であるが、館長の里見さんは穏やかな語り口でありながら、原子力災害への厳しい目を向けられており、原発事故を自分事として考えないといけないと、改めて感じた。

今年も限られた時間の中で、とても多くのことを学ばせていただいた。今後も宮城・福島へ通い、関心を持ったことを調べ、周りの人へ伝え、自身の行動を決めていきたいと思った。

最後に、プロジェクトでお世話になりましたすべての方々に、心より感謝申し上げます。